



ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

January 31, 2015, No. 37

【役員名簿(2014-2016)】(五十音順)

代 表：管 啓次郎 (明治大学)
副代表：結城 正美 (金沢大学)
顧 問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長：高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
事務局補佐：
辻 和彦 (近畿大学)
浜本 隆三 (福井県立大学)
会 計：相原 優子 (武蔵野美術大学)
平塚 博子 (日本大学)
監 事：上岡 克己 (高知大学)
ニュースレター編集委員：
浅井 千晶 (千里金蘭大学)
巴山 岳人 (和歌山大学・非)
村上 清敏 (金沢大学)
会誌編集委員：
小谷 一明 (新潟県立大学)
木下 卓 (愛媛大学名誉教授)
黒崎 真由美 (湘北短期大学)
波戸岡 景太 (明治大学)
John Rippey (滋賀県立大学)
コンピューターセンター：
岩政 伸治 (白百合女子大学)
北国 伸隆 (萩光塩学院)
山城 新 (琉球大学)
評議員：Bruce Allen (清泉女子大学)
池田 志郎 (熊本大学)
石幡 直樹 (東北大学)
太田 雅孝 (大東文化大学)
茅野 佳子 (明星大学・非)
塩田 弘 (広島修道大学)
高橋 龍夫 (専修大学)
高橋 勤 (九州大学)
高橋 昌子 (三重大学)
巽 孝之 (慶応義塾大学)
豊里 真弓 (札幌大学)
中川 僚子 (聖心女子大学)
林 直生 (滋賀大学)
横田 由理 (大東文化大学・非)
吉田 美津 (松山大学)
院生代表：山田 悠介 (立教大学・院)
広 報：喜納 育江 (琉球大学)
河野 千絵 (日本大学・非)
松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成：岡島 成行 (大妻女子大学)
乳井 昌史 (早稲田大学)
野田 研一 (立教大学)
山里 勝己 (名桜大学)
管 啓次郎 (代表)
結城 正美 (副代表)

辺野古の海辺から

代表 管 啓次郎 (明治大学)

秋の日曜日の辺野古の海岸では抗議行動もお休みで、快晴のしずかな午後に息を呑むほど美しい海がひろがっていた。ちょうど干潮時で、反対運動の拠点であるテントのまえでは干潟の地面が露出し、小さな蟹たちが作った土団子が一面に独特な秩序をもって転がっている。日射しも風も強い。海の青と空の青は、青というスペクトラムの別々の段階に位置しながら、それぞれの強さをもって目を射る。青は生死の彼方の色。アオの語源説のひとつにアヒ(間)つまり黒と白のあいだの中間色をさすとするものがあるそうだが、光の領分と闇の領分、昼と夜、この世とあの世の間が、こんなふうに重層的な青により彩られているのだと考えるのは、この海岸ではむずかしくない。死者の魂がこの世界を離れて、清浄な青をわたってゆくなら、その先にはおだやかに落ち着いた、光のない空間が待っているのだろうか。



コンクリートの防波堤を先まで歩いてゆくと、わずかな沖合に波が砕けて見えそこに岩礁があるのがわかる。普天間からここに基地が移設されるなら、ちょうどあのあたりに巨大な滑走路が作られるのだという。湾内の砂地の藻場にジュゴンの食跡が見られることはよく知られているが、もちろんこうして陸から見ていても、どこにジュゴンがいるかはわからない。だがこの海のすべてが破壊される

ことは明らかだ。ここに日本側が施設を建設し、米軍に基地として供与する。建設には莫大な費用が投じられる以上、さまざまな業界のどれだけの利権が絡んでいることかもわからない。ごく素朴に考えて、これだけの見事な海を基地のために潰すとは、なんと狂ったことかと思う。一度建設されてしまえば、そこで失われるものは、もはや未来永劫取り戻せないのに。

環境問題は人間社会の政治問題であり経済問題であるというあたりまえのことが、辺野古の海岸で改めて目のまえに突きつけられてくる。日米関係、本土と沖縄の関係、海洋生物とヒトの関係、基地と地元の関係、海と人々の生活の関係。どこから手をつければいいのかかわからない錯綜した話で、暗澹とした気持ちになるが、守るべきものがあり、反対すべき動きがあることは確かだ。ポストコロニアルを語るまでもなく、日米地位協定に支配される日本は、いままアメリカの事実上の植民地ではないかと思う。基地が島のいたるところで目に入る沖縄では、その事実が人々の日々の生活に全面的に露出している。本土の、特に大都市では、その事実を目をつぶっても日常がつづいてゆくような気になっている。だがいうまでもなく、日本の全土が、じつはおなじ状況に置かれているのだ。社会全体が、驚くべき忘却によって飼い馴らされているにすぎない。沖縄はそれを忘れていない。それは2014年12月14日の総選挙の、沖縄での結果によっても明らかになった。

辺野古での基地建設反対の動きを遠くからでも支援したいと思ったらどうするのがいいのでしょうか、とぼくは政治学者の我部政明さんに素朴な質問をした。語ることでしょね、と我部さんは明快に答えてくれた。いろいろなかたちで、さまざまな機会に話題にする、そこで起きていることとその背後にある歴史を知ってもらい、ということだろうか。それはそうかもしれない。そして現実がいかに表象されるか、その表象をどう受けとればいいのかを問題にするのがエコクリティシズムの基本的な約束である以上、われわれにも無力感を嘆いている暇はないはずだ。

それから海を見ながら、そこに巨大な構造物が作られてゆくところを想像してみた。まず必要なのは大量の鉄だ。工法がどのようなものであれ、珊瑚礁の岩礁にも砂地の海底にも、太い鉄柱が林立することになるのだろう。ここに鉄の森が作られ、その上に滑走路が組み立てられる。鉄鋼業界はこの移設に諸手をあげて賛成している、という話は嘘ではないだろう。もっとも鉄分が水中に溶け出すことによってプランクトンや藻類が繁殖し、魚が増えるという可能性も、なくはないのかもしれない。海の生態系にとっての鉄の重要性は、「森は海の恋人」運動の畠山重篤さんがくりかえし語っていた。さらに、辺境生物学者の長沼毅さんに

よると、宇宙ではいずれすべての物質が鉄になってゆくのだという。陽子が26個、中性子が30個の原子核をもつ鉄とは、もっとも安定していて「溜まりやすい」性質をもっている物質なのだそう。

長沼さんの著書『生命と宇宙の話』（青春出版社）から引用する。

(…) 宇宙の持っている本質は鉄に向かって突き進んでいます。

しかし、鉄だけでは生命が作れないので、いずれは生き物のすべてが減じた静かな宇宙がやってくる。では、なぜ、宇宙は鉄を作るために動いているのか。この意味はまだ、私にもわかりません。

地質学的、というよりも天文学的な時間尺度で見ると、地球生命とは本当につかのまの現象でしかないと思う。いいだろう。そのつかのまの中の、さらにお話にならないくらいのつかのまに、ヒトはその活動により地球環境を激変させてきた。長めにとれば新石器革命以降の数千年、短めにとれば産業革命後のざっと200年あまり、ヒトの活動はやがて地質学的痕跡となるほどに、地表を作り替えてきた。人新世（アントロポセン）という地質学的年代が提唱された所以だ。大規模な森林破壊、鉱物資源の掘り出し、単一耕作のひろがり、治水や埋め立て事業による地形の作り替え、コンクリートとアスファルトによる現代都市の造成、化石燃料の大量消費による大気の組成と気温の変化、汚染による海洋環境の劣化。そしてこうしたすべてにともなう、たくさんの生物種の絶滅。2014年はアントロポセンという用語にとっては当たり年だったようで、5月にはカリフォルニア大学サンタクルーズ校で作家アースラ・ルグィンを基調講演者とするシンポジウム「アントロポセン——傷ついた惑星で生きる技法」が開催されたし、われわれが参加した名桜大学でのISLE-EAシンポジウムにおけるウルズラ・ハイザの基調講演は「アントロポセンと都市の再想像」と題されていた。また台北ビエンナーレはニコラ・プリオー（『関係性の美学』）をキュレーターとして起用し、「大いなる加速——アントロポセンにおける芸術」を主題に掲げている。

辺野古の海の今後の展開。それもまたアントロポセン、つまりヒトによる自然改造の時代の、最新のエピソードのひとつにはちがいない。未来を予測することはできない。だが想像し語ることは、すでにそのプロセスに関わるということだろう。ジュゴンの海を、どれだけリアルに想像できるか。そこから、ヒトの社会と活動をふりかえってみよう。

【学会報告】

International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA)

東アジア環境文学国際シンポジウム

(2014年11月22日[土]～23日[日]@名桜大学[沖縄県名護市])

去る11月にISLE-EAの国際シンポジウムが沖縄県の名桜大学で開催されました。日本をはじめとした東アジア各国／地域にくわえ、アメリカ、カナダ、オーストラリアからの参加者を迎え、活発な意見交換がなされました。また二日目にはフィールド・トリップとして、長年激しい論争の渦中にある辺野古の海辺を訪れました。三名の会員の方々には名護で過ごされた二日間について、また西村頼男さんにはフィールド・トリップについて、それぞれ振り返って頂きました。さらに実行委員長の喜納育江さんに、主催者側の視点から今回のシンポジウムを総括して頂きました。

●国際シンポジウムに参加して

高橋 勤 (九州大学)

現地のことば

山里学長のオープニング・アドレスを聴きながら、特に海外からの参加者は「現地のことば」に大きな衝撃を受けるだろうと考えた。知事選の余韻冷めやらぬ沖縄である。その論議の焦点である辺野古へは、名桜大学からバスで二十分足らず。沖縄を語ることばにリアリティがこもるのは当然であったろう。

管代表の講演もまた「現地のことば」の表現であった。三年前の三月十一日、地震と津波に襲われた南相馬の写真と現地からの報告は、大会の参加者に東北大地震の記憶をリフレッシュする機会でもあったが、その論調はむしろ詩的であり、自然の回復力に対する信奉が美的に語られた。いっぽう、ウルズラ・ハイザ氏の講演は、人工的に改良された自然の可能性を論じられた点で対照的であった。自然の懐に戻るのではなく、むしろテクノロジーによって自然を積極的に改変し人類を中心とした世界を創造する——「アントロポセン」の思想は、テクノロジー国家アメリカからのもう一つの「現地のことば」のように思われた。

私が司会を担当したパネルは動物表象と農業に関するものであった。Estok氏は*Life of Pi* という小説におけるトラの表象について、Chan氏はインドのドキュメンタリーフィルムにおける牛の表象について論じられた。Slaymaker氏は金子光晴の「菌朶」という詩を取り上げられ、Lee氏はウェンデル・ベリーの作品を起点として農業のあり方を再考された。私が聴いた研究発表の多くは充実した内容のものであったように思うが、なかには明らかに準備不足なもの、また英語が

きわめて分かりづらい発表も二三散見された。東アジアで国際学会をやる際には、やはり考慮すべき問題であろうと思う。



(山里勝己・名桜大学学長によるWelcome Address [撮影：村上清敏])

バスの車窓から

二十一日（金）はホテルのチェックインの時間を待つ間、名護市周辺を散策した。路線バスの琉球バスに乗り込んで、本部半島の一部にも足を伸ばしてみたが、驚いたのはバス停の名の難しさであった。それこそ一度聴いただけでは覚えられないような地名が次から次へ飛び出し、アナウンスを聴きながら、異なる文化圏に迷い込んだような錯覚を抱いたのである。

ある老人がバスを降りようとしたときである。足が悪く杖をついた老人であったが、運転手がやさしくバス代を勘定してやっている。そして、バスを降りた老人は走り出したバスに向かって軽く一礼したのである。私にはその老人の一礼の姿勢が妙に印象に残ったのである。

おそらく勘定に対する手間ひまを詫げる思いであつたろうが、私は沖縄の風土と結びついた道徳心のようなものを感じていた。灼けつくような太陽、サトウキビ畑の厳しい労働、村落における規律と敬意、そうした道徳的な風土のひとつの表現として老人の姿勢が偲ばれたのである。

サンゴ礁の破片によって形成された浜辺、乾燥した赤土がむき出した大地、そしてフクギ並木に囲まれひっそりとした民家の佇まい、そうした風景を車窓から眺めながら、私は辺野古とは異なるもう一つの沖縄を体験したような気がしていたのである。

●沖縄で考えた「ダメ」と「イヤ」

浜本 隆三（福井県立大学）

まったく品の無い話を弄してお叱りを受けそうであるが、2014年の流行語大賞に「ダメよ～ダメダメ」という返し言葉が選ばれた。しがたない中年男性の下心ある誘いに、白粉を塗り込めた奇抜な風貌の未亡人が、ただ「ダメよ～ダメダメ」と断り続けるだけの妙な芸だが、人気だそう。この芸に面白味を探るとすれば、それは「イヤ」ではなく「ダメ」と断るところにあるだろう。

「イヤ」という言葉には、拒絶を示す主体的な意思が響く。一方の「ダメ」には、本音を差し置いて建前で断るというニュアンスが漂う。この本音と建前の隙間に、口説く側の期待が賭けられる。その言外の駆け引きに、見る人もひきつけられる。しかし、「イヤ」と断る未亡人に、しつこく押しを掛け続けられれば、見る人は興ざめするだろう。

学会期間中、この「ダメ」と「イヤ」の違いをぼんやりと頭の中で考えていた。ちょうど沖縄へ発つ5日前、県知事選挙で辺野古への基地移設に反対を訴えた新人の翁長氏が、現職の仲井眞氏を約10万票の大差で破ったと報じられた。沖縄は基地とその移設に対して、改めて「イヤ」という拒絶の意思を示したわけである。しかし、政府は、「イヤ」を「ダメ」へとすり替えて、本音を別に探り出し、移設のための隙を見出そうとしてきた。「イヤ」という沖縄に、今後さらに強い押しが掛け続けられるだろう。

22日付『沖縄タイムズ』紙の朝刊には、「沖縄から目をそらす本土：1億人の無関心」との見出しで、「え、きょうが知事選なの？」「翁長って誰？」と、「本土」から来た旅行者の街頭インタビューが載っていた。もちろん私は、「無関心」ではないと思っている。しかし、自分がインタビューを受けていたらどう答えていたかと考えて、とたんに自信を失った。

学会の初日、名桜大学の山里学長が沖縄の歴史と現状を開会の辞でご説明下さった。一方で、東日本大震

災が本学会の研究テーマの一つとして定着しつつあるなか、沖縄の基地移設やそれにとまなう環境問題についての研究発表がみられなかった点には寂しさを覚えた。その理由は、きっと無関心や資料面が原因ではないだろう。ひょっとしたら沖縄について本土の人が語ることに、真正性に関わる不安を覚えるからなのかもしれない。それはどこか、「ダメ」と「イヤ」の違いに通じるところがあるように思える。

学会2日目、フィールド・トリップで辺野古を訪れる機会に恵まれた。ここでは10年間も、「イヤ」という意思が示され続けてきた。現地でも耳にした「工事が始まってしまえば、もはや辺野古は『問題』ではなくなってしまう」という言葉が印象的であった。10年という歳月を前にすれば、わずか2時間ばかり訪れた人になが語れるのかと、たちまち萎縮してしまう。だが、経験に本質を求めれば、記憶の継承は不可能である。辺野古で聞いた「イヤ」という生の言葉がすり替えられてしまわないように、ながが出来るかと、遠く辺野古湾を眼下に眺めながら、帰路の飛行機で自らに問うた。

●第4回東アジア環境文学国際シンポジウム参加報告

清水 美貴（金沢大学・院）

2014年11月22日～23日にかけて、沖縄県名護市にある名桜大学において今回で4度目となる東アジア環境文学国際シンポジウムが開催された。大会のテーマは“Unsettling Boundaries: Nature, Technology, Art”。シンポジウムの会場となった名桜大学は那覇空港から車で2時間ほど北上したところにあり、南北に延びる高速道路を使ってむかう。その道中、空港から繁華街に至るまで左手には基地と市街地を分ける金網のフェンスが続いている。第二次世界大戦後から70年代初頭に日本に返還されるまでアメリカの統治下にあった歴史やいたるところにフェンスが張り巡らされた現在を考えれば、沖縄がアメリカと日本の境界にあるとみることが出来るだろう。本シンポジウムのテーマ「揺らぐ境界」はそうした沖縄の問題も内包されているのではないかと、そんなことを考えながら名桜大学に向かった。

さて、今回の東アジア環境文学国際シンポジウムには、韓国、台湾、日本のみならずアメリカ、オーストラリア、シンガポールなどから80名以上の参加者があった。プログラムは21日の夜にブルース・アレン先生によって行われたプレイベント、作家石牟礼道子のドキュメンタリー映画『花の億土へ』の鑑賞会から始まり、翌日から2日間にわたって90分のセッションが4回行われた。1つのセッションは4部屋に分かれ、

15分の発表を3～4つ行い、その後質疑応答を行う形で進められ、50以上の発表が行われた。基調講演にはUCLAのウルズラ・ハイザ教授、明治大学の管啓次郎先生のお話をいただき、フィールド・トリップでは辺野古視察とたいへん豪華で充実した2日間のプログラムであった。

それぞれの発表については他の方がご報告されると思うので、ここでは森田系太郎さん企画による(Post) Graduate Colloquiumについて報告したい。今回は川上弘美の『神様2011』(英題: *God Bless You, 2011*)をテキストに韓国、台湾、日本の大学院生がそれぞれ10分間の発表をしたのち、全体で議論をするというものだった。『神様2011』は1994年に発表された川上弘美のデビュー作である『神様』を2011年3月11日に起こった東日本大震災を受けて書き直したものである。近所に越してきたクマと川に散歩に出かけるという『神様』で描かれた日常風景が原発事故後どのように変わってしまうのかが『神様2011』では描かれる。最初に提示された(1)小説家が作品を書き直すということについて、(2)3.11以前と以後で変わらないもの、変わったものとは何か、(3)『神様2011』には何が付け加えられ、何が加えられなかったのか、(4)震災直後にそれを作家が言語化することは可能なのか、といった議題を中心に活発な議論が行われた。それぞれの発表だけではなく、ひとつのテキストを台湾や韓国の大学院生と議論することは今後の東アジアの環境文学研究の推進力になるのではないかと。とても刺激を受けた企画だった。

●フィールド・トリップ(辺野古)

西村 頼男(阪南大学名誉教授)

名護を初めて訪れたのは2003年3月に琉球大学で開催された文学・環境学会に出席した折だった。その折、学会の直前に名護の町を歩き亜熱帯の大きな樹木(ガジュマル)や色鮮やかな花々に見惚れて歩いた。雨に打たれながら世界遺産になったグスクまでバス停から歩いたのも印象に残っている。あの時、米軍基地のことは頭の中では奥の方にしかなかったが、翌日、那覇で一日観光バスに乗ると頭の中は一変した。沖縄戦の折、軍人が自決した塹壕をつぶさに見た時、米軍の存在は眼前のことになった。終戦直前に見たB29の姿も思い出した。

今回、沖縄に向かう前、沖縄知事選を目前にした日に沖縄タイムスの記事を転載した新聞記事が目にとまった。その記事によると、現在89歳のある女性はキャンプ・シュワブが建設される前の美しい元風景を語れる最後の一人らしい。その頃は天然の真珠貝がずらりと並んでいたこともあるという。



(辺野古にて、活動家の方の説明を聞く[撮影: 村上清敏])

その美しい辺野古の海を見たのは11月23日(日)の午後だった。1時20分頃に名桜大学のキャンパスをバスで出発したが、ヤマトンちゅうには真夏のような暑さである。車中で埋め立て計画地の地図を受け取り、山城新さんの説明を聞いてキャンプ・シュワブの入り口にさしかかった。そして我々が確認できるようにとバスが停止すると2名の警備員が書類に何か記入した。その様子を見て、いよいよ埋め立て計画地に入るのだと少し身構えた。辺野古と大浦湾は山とサンゴの海に囲まれており、大浦湾はジュゴンがやってくる北限である。その餌は浜に近いところにあるから、埋め立ては潮の流れを変えるものであり、その生息地を奪うことになる。また、サンゴは長い歳月をかけてできたものであるから、国際機関もサンゴの保護を2000年と2004年に訴えている。美しい大浦湾を眼前にしながら参加者は活動家から説明をうけたが、「座り込み=3871日」という看板がとくに目をひいた。テントを張って座り込み、10年以上も続けていることに沖縄の人々の強い意志を感じた。沖縄の経済は米軍基地の存在による部分が多いと思われ勝ちだが、観光収入の方が多い。2000年にグスクと関連遺産群が世界遺産に登録されたのは内外からの観光客の増につながった。しかし何といても沖縄にとって第一の観光資源は美しい海である。沖縄出身の作家である目取真俊(めどるましゅん)に「ブラジルおじいの酒」という作品がある。主人公の若者は沖縄の本土復帰直前に、本土の一円玉の色、軽さ、絵柄の粗悪さに気付いて思う。「日本復帰なんていいことばかりでないんだな」と。目取真によれば基地こそ沖縄の発展を阻害しているが、今、政府は沖縄の貴重な観光資源を奪い、住民と観光客に危険な新しい基地を建設せんとしている。

●東アジア環境文学国際シンポジウム (ISLE-EA) を終えて

喜納 育江 (琉球大学、ISLE-EA 実行委員長)

2014年11月21日から23日に沖縄県名護市の名桜大学との共催で行われたISLE-EAは、多くの方々のご尽力で、盛会のうちに幕を閉じた。2007年の金沢での国際シンポジウムから、日本、韓国、台湾の輪番で2年ごとに開催されるこの「東アジアシンポ」の2014年の会場を沖縄にしよう、という話が持ち上がったのは、ちょうど開催の1年前の夏だったと思う。実行委員会にとっては、まるでドミノ倒しのような1年だった。

ところで、沖縄でのASLE-Japan国際シンポは、2003年に琉球大学での開催以来、二度目である。(このことは、山里勝己名桜大学長の講演でも述べられている。ASLE-Japanホームページから講演録にアクセスできるのでご一読いただきたい。)そして、今回は、名護市にある名桜大学で開催することになった。名護市は、新たな米軍基地の建設計画から固有の貴重な生態系を守れるかどうか、今まさに国際的な注目を集めている辺野古が位置する沖縄北部の都市である。沖縄の北部は、美しい海はもちろん、沖縄の言葉で「やんばる(山原)」と呼ばれる、亜熱帯の生物多様性に富んだ山林を擁する。今回のISLE-EAを沖縄の北部で開催しようという流れには、いわば近代とポスト近代の自然観がせめぎ合うこの沖縄北部を、日本や東アジアの友人にも見てほしいという主催者側の願いもあった。

今回のISLE-EAは、従来の国際シンポとは異なり、主に二つの不安要素を抱えていた。まず一つ目は、大きな外部資金を獲得できなかったことである。その結果、東アジアの参加者を一部でも「招待」する、という従来の形をとることができず、参加費をはじめ、すべての費用を参加者に負担してもらうことになった。もう一点は、通訳を付けず、すべて英語で行うことにした点である。こうした要素によって参加者が減らないか、また参加者の間で細かいニュアンスまで意思疎通ができるかが懸念された。しかし、主催者側の心配をよそに、全体の参加者は予想以上の80名余り(うち約半数の参加者が外国人)だった。参加者が参加費をすべて負担するのは、国際学会が珍しくない時代には妥当な開催方法だとは思ったが、韓国のドゥーホー・シンさんが、「これでいい。集まって学術的な議論をする場をとにかく設けることが重要」とおっしゃってくださった時には安堵した。

こうした学会では、実行委員長は、会場全体をぐるぐる回る回遊魚のようなものである。なので、ブルース・アレンさんによる前夜祭の映画上映を除いては、私は残念ながらどの講演や発表にも落ち着いて座る余裕がなかった。ただ、委員長の特権として、参加者からの感想を直接受ける機会には恵まれた。例えば、台

湾のイーピン・リャンさんは、管啓次郎代表の基調講演の中で見た、3.11後に「野生を取りもどしつつある(re-wilding)」福島海岸の映像、テクノロジーと物語の調和に心打たれたそうだ。ウルズラ・ハイザ氏の講演も、「都市の自然」と、anthropocene(中国語では「人間世」というらしい)への関心を高めてくれたそうで、『ミセス・ダロウエイ』の中で花を買う行為にはどんな意味があるのかと思わず考えてしまった」とおっしゃっていた。少し唐突なコメントだが、大勢の参加者のそれぞれが基調講演を聴きながら、色々な考えを巡らせていたのだとわかった。

また、韓国のセジュン・カンさんは、参加したパネルの中で、「エコクリティシズムと子どもたち」が特に気に入ったそうだが、「もう少しじっくり発表を聞きたかった」ともおっしゃった。確かに、一人持ち時間15分というのは、いかにも駆け足で、かなり物足りなかったかもしれない。次回の課題であろう。

さて、沖縄在住の実行委員にとって、もう一つ重要だったのは、辺野古への「フィールド・トリップ」だった。これについては、実行委員の山城新さんがすべて一人で企画・実施に奔走してくれた。海岸に張ったテントから、辺野古新基地建設の動きを、四六時中見張り続ける運動家の人々の声は、50名余りの参加者にどう響いたのだろうか。観光コースではない、沖縄の現実をどう思っただろうか。辺野古の問題で、私たちは試されていると思う。「私たち」というのは、もちろん地元の人間ばかりではない——参加した方々がそう感じてくださるようになったなら、協力した方々も喜んでくれると思う。

ISLE-EAでは、実行委員以外の方々からも多大な支援をいただいた。特に、名桜大学教授の小川寿美子さんとその学生の皆さんには、完璧なまでの支援をいただいた。また、懇親会では、名桜大学の中山登偉さんが、琉球に滞在した冊封使の徐保光が詠んだ漢詩をすばらしい朗読で紹介してくださった。また、アジアと沖縄の政治的関係について講義をしてくださった琉球大学教授の我部政明さん、宿泊、送迎、そして懇親会まですべてにおいて便宜を図ってくださった名護市のホテルゆがふいんリゾートおきなわの方々にも感謝申し上げたい。また、ISLE-EAの美しいウェブサイトは、コンピュータ委員の北国伸隆さんが作ってくださった。ISLE-EAの存在意義を世界に発信するという目的のみならず、参加者との連絡ツールとして、今回ほどウェブサイトの重要さを痛感した学会はなかった。

この場を借りて、お世話になったすべての方々にお礼を申し上げたい。そして、次のISLE-EAでは、どんな新しい議論が登場してくるのか、東アジアとのさらなる連携に期待したい。

【全国大会報告】

第20回ASLE-Japan／文学・環境学会 全国大会報告

(2014年11月24日[月]@名桜大学[沖縄県名護市])

本年の全国大会は、ISLE-EAシンポジウムの翌日に同じ名桜大学を会場として開催されました。例年より規模は小さかったものの、二部屋に分かれての四つの研究発表の後、院生組織による企画の勉強会と、大変充実した内容でした。二人の会員の方にそれぞれ報告して頂きました。

今年度は、二つの会場でそれぞれ午前と午後各1名の個人発表が行われた。会場①における午前の研究発表は、中川直子氏（立教大学大学院）による『『夢見心地』の言語風景：パリンプセストとナラティブ・コラージュ』であった。中川氏は、副題中のキーワードを用い、アニー・ディラードの「いまここ」の風景に宿る時間的・空間的多層性を明らかにした。また、ディラードが視覚、嗅覚、触覚等の感覚を総動員することで多層的風景へ没入していくと論じた。今後、ディラード作品の構造と「巡礼」の関係や、移動する主体を表す語の分析を進めるとのことで、さらなる成果報告が楽しみである。

午後の研究発表は、佐藤有紀氏（立教大学大学院）の『『倂』を翻訳する：国木田独歩の自然』であった。佐藤氏は、「画や歌でばかり想像している武蔵野を、その倂ばかりでも見たい」という、独歩の近代以前の武蔵野への憧憬が作品誕生の原点であることに着目し、作品「武蔵野」や「忘れえぬ人々」に、近代的言語体系に「倂」の存在を浮かび上がらせる、ある種の“翻訳”行為をみるのが可能なのではないか、という新たな読みを提示した。独歩のまなざしだけでなく、作中人物たちの会話とそこに生じるズレを通して、武蔵野の「倂」と「今」の交錯・混在をあぶり出すアプローチは興味深かった。

大会の最後には、*Material Ecocriticism* (Serenella Iovino and Serpil Oppermann, eds., Indiana UP, 2014) のイントロダクションを課題テキストとした、院生企画の勉強会「New Materialism and Ecocriticism」が行われた。まず、清水美貴氏（金沢大学・院）、青田麻未氏（東京大学・院）、菅井大地氏（名古屋大学・院）より、New Materialismのポイントとして、環境・自然の物質性とその相互作用への注目により二元論的枠組みをこえるねらい等が挙げられた。次に、New Materialismの訳語は何か、この理論的試みは“新しい”のかという疑問2点が示され、従来の理論との関係、物語と物質性との関係、“実践”的意義など多様な視点から議論された。

(豊里真弓)

久しぶりのASLE-J参加だというのに体調を崩してしまいタイミングの悪さを嘆いていましたが、無理をしても参加してよかったと思える一日でした。今回聴講したのは、森田系太郎氏による「富岡多恵子の『芻狗』：女性、動物（的）、スキゾ」と、李恩善氏の「世界と関わること、時間をつくりだすこと—加藤幸子「ジーンとともに」の時間世界」の二つの個人発表です。

森田系太郎氏は、男をモノとして消費する富岡多恵子の『芻狗』の主人公がいかに関「動物的」であり、またこのような主人公の描き方がフェミニスト富岡の戦略であるという論を展開されました。人間と動物の「欲」の違いを〈他者〉との関係の有無に見だし、〈他者〉との関わりが希薄となった戦後アメリカの消費社会を「動物的」なものとみなしたアレクサンドル・コジェーヴの主張を前提とした本発表は、主人公の統合失調症（スキゾ）的言動が、「個」のなかで閉じた回路をもつという意味においても「動物的」であること、また主人公の「動物化」が、「女性の動物化」の構造を明らかにしたグレッタ・ガードの戦略とは逆方向にあり、図式の罫に自ら嵌ることでサバルタンの抵抗を示していることを明らかにされました。

加藤幸子の「ジーンとともに」の時間世界に注目された李恩善氏は、人間と環境の相互作用という視点から「時間を取り戻す」ことの意義を論じられました。まず、ミヒャエル・エンデの『モモ』を出発点として、「近代化された時間」と「失われた時間」についての考察が行われ、次に、「時間はまさに主体と他者との関係そのものである」というレヴィナスの思想を援用しながら、時間を取り戻すことは主体を取り戻すこと、すなわち世界と関わりあうことであるということが論じられました。このような観点から「ジーンとともに」における時間世界を考えたとき、作品に描かれる時間がエコロジカルな相互作用そのものであることを李氏は強調されました。質疑応答ではお二人のご発表に対して多くの質問やコメントがあり、惜しみながらも発表時間の終了を迎えました。

(松永京子)

【ASLE-J Grad Journal (院生組織だより)】

ASLE-J全国大会 院生企画報告

菅井 大地(名古屋大学・院)

2014年度ASLE-Japan全国大会において、院生企画として“New Materialism and Ecocriticism”の勉強会が開催された。使用テキストは*Material Ecocriticism* (Serenella Iovino and Serpil Oppermann, eds., Indiana UP, 2014) の、編者らによる導入部“Introduction: Stories Come to Matter” (pp. 1-17) であった。今回の勉強会が無事に開催された旨をここに報告する。

以下に使用テキストの概略を簡潔に述べる。本論は二元論を排し、物質間の相互作用を認識することが重要であるというものであった。生物、無生物にかかわらず、あらゆる物質は行為体であり物質間の相互作用は無視することができない。世界を言語的な構築物とみなすポストモダンの言説に対し、物質とそれを指し示す記号との結びつきは密接なものであるとしたうえで、物質間の相互作用そのものに目を向けるべきだと編者らは主張する。また、物質同士の相互作用を「物語」として捉えることで、非人間中心主義的な見地へ向かうという。人間が知覚できるか否かにかかわらず、物質同士は互いに影響しあっており、そこにはテキスト性が存在する。こうしたテキスト性の拡大解釈が、環境批評の分野をさらに発展させることにつながるのだと述べられている。

勉強会は、院生による事前打ち合わせの際に挙げられた疑問点を大きく二つにまとめ、それを議題として提示し、参加者と議論するという形で進められた。提示された議題は以下の二点である。

1. “New Materialism”の訳語について
2. 本論の「新しさ」とは何か

一つ目の訳語の問題については、「新唯物論」とすべきか、「新物質主義」とすべきか、または「新」から離れて別の語を充てるべきかといった点を提示した。それに関連して、二つ目の議題においては、そもそも本論は本当に「新しい」ものなのかという疑問を提示する形となった。

一つ目の訳語の問題に関しては、使用テキストの文脈内だけで語ることは不十分であり、他の論考などと比較して総合的に考察する必要があるという意見が出された。また、未だ明確に定義づけられた語ではないため、各論者がそれぞれ異なった意味合いで使用している可能性もある。そうしたことも考慮しつつ、訳語

に関しては今後慎重に検討していく必要があるだろう。

二つ目は、今回使用したテキストが主張する「テキスト性の拡大」という概念が、そもそも新しいのではないかという問いに端を発する議題であった。人間と非人間、及び文化と自然といった二項対立を突き崩そうとすること、また物質間の相互関係に着目するという試みは、これまでの環境批評、環境思想の中にもあったのではないだろうか。本論の強みとして挙げられている部分が、既に提示されてきたものであるとすれば、本論はややインパクトに欠けるものとなる。

これに関しては、様々な角度から意見が交わされた。本論が主張している「新しさ」は必ずしも新しいものではないが、これまで環境批評で交わされてきた議論に、一定の理論的枠組みを与えようとするのが本論の試みであるとするれば、環境批評という分野に寄与することにつながるのではないかと。また、ロマン主義的であるとして批判されたDavid Abramの“more-than-human”という概念について、科学的説得力を付加しつつ擁護しようとする論調であるとの見解も出された。一方、歴史的にみると、これまで無数の「新しさ」が主張されてきていることから、それぞれの時代や文脈において各論者が主張する「新しさ」というものに、我々がどこまで付き合う必要があるか、それらを鵜呑みにしてしまっているのかという意見も出された。

「新しさ」に関する問題について、一つの結論が出るには至らなかったが、今回使用したテキストは“Material Ecocriticism”という概念に対して理論的枠組みを与え、議論の場を準備することを試みている印象を受ける。環境批評において、この概念の発展を如何に促すかという点は今後の課題であろう。しかし今回の勉強会は、議論をより一層深化させる可能性を示唆する刺激的な意見交換になったのではないかと感じている。

今回の院生企画は金沢大学院生の清水美貴さんが提案・企画したもので、清水さんにはテキストの準備などを行っていただいた。また大会実行委員長の山城新先生には、教室の手配やテキストの印刷等を行っていただいた。この場を借りてお二人に御礼申し上げる。またプログラムの都合上、出席しにくい時間帯であったにもかかわらず多くの先生方にご参加いただき、貴重なコメントをいただくことができた。末筆ながらご出席賜った先生方にも感謝申し上げます。

【イベント報告】

日本初・環境人文学セミナー

安藤百福センター主催第5回環境思想シンポジウム報告

(2014年11月27日[木]@安藤百福記念 自然体験活動指導者センター[長野県小諸市])

結城 正美(金沢大学)

日本ではEnvironmental Humanitiesについてほとんど知られていない、だから機会があったら話をしてほしい——カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)で環境人文学の構築に取り組んでいるウルズラ・ハイザ教授にかねてよりそうお願いしていたのだが、ISLE-EA基調講演のための来日にあわせてその機会が到来した。安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターの支援により、2014年11月27日(木)、センター主催環境思想シンポジウムとして環境人文学セミナーの開催が実現したのだ。しかも感謝祭の休暇を利用して初来日するハイザさんの同僚ジョン・クリステンセンさんとのジョイント講演という夢のような内容。平日開催にもかかわらず約30名の参加があった。



当日はまずイントロダクションとして、結城が環境人文学の新しさと古さについて話した。環境人文学の新しさは、文学、歴史、人類学、人文地理学といった異分野間で環境をめぐる問題意識や研究課題を共有し、協働的に研究を進める点にある。こうした動きが約10年前に始まったわけだが、協働的研究はそれに関わる研究者の専門的知識を前提とするので、従来と同じく専門領域における研究の深化が不可欠だ。ハイザさんとクリステンセンさんは、それぞれ文学研究と歴史研究の碩学である一方で、異分野との学問的対話を意欲的に進めており、古くて新しい環境人文学を体現しているといえる。

セミナーは、(1)ハイザさんによる環境人文学の紹介、(2)クリステンセンさんによる講演“Digital Environmental Humanities”、(3)ハイザさんによる講演“Urban Environmental Humanities”という構成で3時間にわたって行われた。(1)では、1970年代以降の学術知の再編成と関連づけながら環境問題への多

角的研究アプローチがマッピングされた後、理系／文系を問わず次世代に環境の問題をクリティカルに考えさせる役割が環境人文学に求められるという点が力説された。



([左から]本学会会員で安藤百福センター長の岡島成行さん、ハイザさん、クリステンセンさん、結城、通訳をお手伝いいただいた本学会会員の森田系太郎さん)

続くクリステンセンさんの講演では、デジタル技術と人文学のインターフェイスで展開する環境史研究が紹介された。そこで強調されたのは、歴史研究にデータを使うだけではなく、デジタル的なものの文化的意味を問うかたちで、歴史とデジタル技術を双方向的に見据える研究スタンスである。Thick Mappingという手法やThe City Nature Project <<http://citynature.stanford.edu>>などの具体例に言及しながら、データによって可視化される人と環境との関係や、環境データの物語性が明らかにされ、それらが環境政策の点検や提言に接続するという実用性も指摘された。

最後のハイザさんの講演では、文学研究に重点をおくかたちで、世界人口の大半の居住地である〈都市〉をめぐる環境人文学の実践が紹介された。文化／自然、都市／田舎といった素朴な二元論的概念化がもはや意味をなさない現在、私たちに必要なのは、都市を自然・野生としてとらえる見方や、P. シャモアズ『テキサコ』やK. T. ヤマシタ『オレンジ回帰線』等に描き出されているようなbiocity(生物学的に機能する都市)の探求ではないかという問題提起がされた。

広い視野と緻密な分析で織り上げられた本セミナーは、一枚岩的でない人文学の〈実用性〉を開示し、日本でも問題になっている人文学の再編成に関して示唆とヴィジョンを与えるものであった。

【イベント報告】

シンポジウム「動物のいのち」レポート

(2014年11月29日[土]@明治大学中野校舎)

波戸岡 景太(明治大学)

本格的な冬が近い、11月の末。JR中野駅から明治大学の新しい校舎へと至る道には、その日もすさまじいビル風が吹いていた。いつだったか、熟練の漫談家がここを歩きながら、かつらが飛ばされるのが怖くてね、とアナウンサーに笑いかけていたことを思い出す。でも、私を含めた歩行者の誰もが、この寒空の下では表情を消して先を急ぐしかない。

キリン本社ビルの敷地を横切り、オフィスビルさながらの都市型大学の敷地へ。「中野四季の都市」と名付けられたこの一帯には、かつては警察の学校があり、そのまたかつては陸軍の学校があり、さらに綱吉の時代まで遡ると野犬保護施設があったという。このことにふれて、登壇者の一人である小説家の古川日出男氏は、私たちにこんな問いを投げかけた——あのか「ここ」に集められた10万匹の犬たちは、いったい「どこ」へ消えたのでしょうか？

ここにはない動植物を求め、ここではないどこかへと旅立ち、そして物語を手にして再びここへと帰還した語り手たち。それが、今回のシンポジウムの登壇者全員に共通することだった。

写真家の赤阪友昭氏は、望遠レンズを使わずに、熊の母子の日常を撮影することに成功した。華道家の片桐功敦氏は、福島津波によって新たな生を得た花・水葵の美しさを知り、同地に赴きその場で花たちを活けた。

一方で、『聖地Cs』が話題の小説家・木村友祐氏は、原発事故後に取り残された家畜に思いを馳せながら、飼い猫との愛の日々を切々と語り、同じく小説家の佐川光晴氏は、屠場での10年以上におよぶ生々しい体験を、豪快な身振り手振りで語って会場を沸かせた。

転じて、美術家の佐々木愛氏は、持ち時間の15分間をほとんど無言のままで過ごした。それでも、彼女の物語は私たちの視覚を刺激し、それはやがて、鳥と森と水が一体となった一枚の絵となった。どういうことか。タネをあかせば、彼女はずっと、壇上で絵を描いていたのである。そして私たちは、その様子をライブで、壇上のスクリーン越しに見続けていたのであった。

演出家の高山明氏は、かつてホームステイ先で出会った元ベトナム兵の男の話を披露した。暴力への飢えが抑えきれずに日々を過ごすその男は、当時十八歳であった高山氏を、連日のようにハンティングに連れ出したという。

休憩をはさみ、午後は、鹿の角や骨から可憐な花々を彫りだす彫刻家・橋本雅也氏の、鹿狩りの話から始まった。鹿のお腹に、あたたかな胎児がいたこと。そ

の光景に愕然としたこと。持って帰った大量の骨。それらが貴重な素材になることを理解しながらも、彫り始めることができなかった苦悶の日々。スライドに映った氏の作品は、ただ祈りとししか形容できない白さを放っていた。

けれど、登壇者が変わり、会場はまた違う色へと転じた。服部文祥氏は、ほとんど道具を持たずに登山をし、ハンティングによってその日の糧を得るのだと自らを紹介した。『サバイバル登山入門』の著者でもある氏にとって、狩猟とは、ある種の美学である。むろん、その「美しさ」は、他の語り手のような「正しさ」にはなかなか結びつかないのだが、その挑発的な姿勢は、ヒトとは何かを思考せよ、と聴く者たちに迫ってくる。そして、この矛盾をはらんだ「美」のあり方は、ドキュメンタリー監督である瀬戸あや氏が、本橋成一氏の写真集『屠場』に見た「美」とも呼応した。

振り返ってみれば、ここまでに語られた全ての物語の中心には、いつでも、動物のいのちを取り扱う人間たちの生、それについての考察が横たわっていた。だから、続いて登壇した小説家の古川氏は、宮沢賢治の詩を経由して、今度は人間たちの死をどう扱うか、極言すれば、自然界の物質としての私たち自身の屍体をどうするべきかとフロアに問いかけた。

動物のいのちを考えるための、ヒトのいのち。その大きなテーマを語るべく、分藤大翼氏と山口未花子氏という、文化人類学者たちからの報告がなされた。アフリカの地のピグミーと呼ばれる人々の日常を記録しながら、動物を介してつながる人間社会の可能性を語る分藤氏。そして、カナダ・ユーコンの長老と対話しながら、あらためて狩猟家への道を歩みたいと宣言する山口氏。シンポジウムは、学問を通じて動物にアクセスする二人の物語と、ディスカッサントとして登壇した芸術人類学者・石倉敏明氏、および私・波戸岡の総括を経て、ディスカッションへと移った。

そもそも「いのち」は、言葉にできるのか？ そうした根源的な問いかけがとりかわされる、濃密の討議だった。そして、今回の総会司会である管啓次郎会長は、ともすれば物語の濁流となりかねない議論の行方を、その勢いをそぐことなしに一本の太く豊かな流れへと導く船頭のようなようだった。

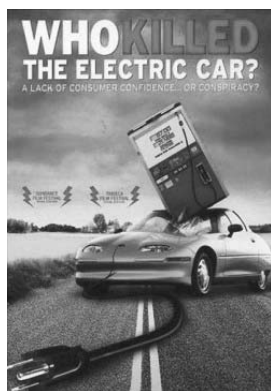
シンポジウムは、予定通りの17時ちょうどに幕となった。会場の扉が開かれ、立ち上がる参加者たち。その顔が、今朝の無表情を氷解させ、わずかに頬を紅潮させていたことが印象に残っている。

【シリーズエッセイ シネマ×環境 (4)】

クリス・ペイン『誰が電気自動車を殺したか』

塚田 幸光(関西学院大学)

「GM (ゼネラル・モーターズ) にとっていいことは、アメリカにとっていいことだ」。チャールズ・ウィルソン元GM社長の名言は、このモーター・カンパニーがアメリカそのものであったことを指し示す。GMの利益とは、アメリカの利益。「いつかはキャデラック」と夢見るアメリカ人にとって、GMはアメリカン・ドリームを体現する企業に他ならない。『ピンク・キャデラック』(1989)や『傷だらけのキャデラック』(1989)などの青春映画において、キャデラックこそがヤング・アメリカの象徴だったことを想起してもいい。だが、2009年6月1日、この巨大企業は、連邦倒産法第11章(チャプター・イレブン)の適用を申請し、国有化されてしまう。その後、多額の公的資金投入で復活を果たすが、もはやそこにかつての威光はない。では、何故GM帝国は、失墜したのだろうか。燃費効率の悪い大型車への固執、ガソリン高と日本メーカーの攻勢、高労務コスト。転落の原因は枚挙にいとまがない。しかしながら、その原因の一つには、意外にも電気自動車EV-1の存在がある。ガスギャズラー(ガソリン食虫)GM車ではなく、電気自動車? クリス・ペイン監督『誰が電気自動車を殺したか』(Who Killed the Electric Car?, 2006)は、EV-1の謎をめぐるドキュメンタリーだ。



トヨタのハイブリッドカー・プリウスの登場以前、GMがエコカーで業界を圧倒的にリードしていたことはあまり知られていない。1990年代のカリフォルニア、全米最悪の大気汚染に苦慮した州政府は、州内で走る新車の一部をゼロエミッション車(ZEV)とする規制を打ち出す。結果、自動車メーカーは、電気自動車(EV)の開発に躍起になるのだ。GMのEV-1、フォードのRanger EV、トヨタのRAV-4 EVなど、各社はEVをリース提供し、多くの愛好家を獲得する。特にGMのEV-1は、パーフェクトなEVだった。時速100キロまでの加速がわずか8秒。5時間の充電で240キロの走行距離を誇り、充電コストはガソリンの10分の1。

そして、ハイウェイを滑走する美しいフォルム。俳優のトム・ハンクスやメル・ギブソンは賛辞を贈り、EV-1は一時期、新時代のキャデラックとなる。だがこのEV-1は、突然、姿を消してしまう。



GM / EV-1

エコからオイルへの転換、クリントン政権からジョージ・W・ブッシュ政権への移行に伴い、EV-1の置かれた状況は一変する。ZEVに多額の補助金を出し、環境保護を打ち出したクリントンに対し、石油メジャーと一体化したブッシュ政権は、カリフォルニア州の排ガス規制を骨抜きにするからだ。石油メジャー、自動車メーカー、米政府の「共闘」によって、EV開発プログラムは闇に葬られる。GMはEV-1のリースを終了し、車をすべて回収し、スクラップへ。他社もそれに追従し、短期間の間にカリフォルニアからEV、つまりエコロジカルな痕跡は消され、再びガソリン車が横溢する。エコカーって何、という具合に。

石油メジャーと自動車会社の「犯罪」は、実はこれが初めてではない。例えば、1920年代の米都市は、路面電車が走るエコロジカルなコンパクトシティであった。だが、1930年代から50年代にかけて、GMやシェブロンが設立したナショナル・シティ・ラインズ社(NCL)は、45都市100以上の電気鉄道会社(路面電車)を買収し、GM製のバスへと置き換えている。電鉄が廃止され、州間高速道路が整備され、車社会が加速するのだ。そしてガソリンが大量に消費され、石油メジャーは利益を上げる。路面電車からバスへの転換であり、EV-1の「抹殺」はそのデジャヴに他ならない。

歴史に「IF」はありえない。だが、GMがEVと環境を重視していれば、世界一の座は揺るがなかっただろう。カリフォルニアでのEV撤退。この体験が、トヨタにハイブリッド開発を決断させたのは興味深い。石油メジャーに配慮しながら、次世代車を開発すること。EV-1の抹殺とプリウスの出現は、歴史の皮肉だろう。『誰が電気自動車を殺したか』は、そのドラマを鮮やかに描く。

事務局より

■2014年度ASLE-Japan／文学・環境学会
全国大会総会のご報告

2014年11月24日（月、9:00-11:00）に、名桜大学キャンパス（沖縄県名護市字為又1220-1）212講義室において、2014年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2013年度会計報告および監査報告、2014年度予算案、会誌印刷会社の選定、一部役員改選案、会計業務円滑化のための会則変更案、「エコクリティシズムを学べる大学・大学院」についてのウェブ掲載、『文学と環境』表記統一、以上が審議を経て了承されました。続いて、ニューズレターの発行、現会員数（175名）、「会員書誌情報」更新と更なる情報提供についての呼びかけ、院生組織の活動、ASLE-Japan20周年記念出版事業についての報告がありました。名桜大学で行われた2014年全国大会では、実行委員長の山城新さまに大変お世話になりましたこと、この場を借りてお礼申しあげます。

●2015年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会の日程およびプログラムの詳細については、確定次第、会員メーリングリストやASLE-Japanウェブサイトにてお知らせします。

<会費納入のお願い>

2014年度の年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

口座番号 01300-0-93821
加入者名 文学環境学会
（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様からお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻（twain1910@gmail.com）までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。



【発行】

代表 管啓次郎
事務局 長岡技術科学大学 高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603-1
Tel/Fax: 0258-47-9805（直通）
E-mail: tayako@vos.nagaokaut.ac.jp

【編集】

編集代表 金沢大学 村上清敏
〒920-1192
石川県金沢市角間町
Tel: 076-264-5827（直通）
E-mail: melville@staff.kanazawa-u.ac.jp

..... 広報より

広報担当では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブページに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をまいりますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の河野千絵（chiekono28@gmail.com）までお送り下さい。次回の更新は2015年5月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、
河野千絵、松永京子

..... 編集後記

ニューズレター第37号をお届けします。ご覧のとおり、本号はさる11月22日・23日に名桜大学（沖縄県名護市）で開催された「東アジア環境文学国際シンポジウム」ならびに24日同会場で開催された「第20回ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会」の特集号となっています。事務局に無理を言って、通常の8頁から12頁に増頁をお願いしましたが、両大会の雰囲気の一部が読者にも伝わりましたでしょうか。

執筆をお願いした方々には、厳しい字数制限を課したうえに、写真の提供までお願いしておきながら、ご提供いただいた写真の一部は紙幅の関係から掲載を見合わせざるを得ませんでした。この場を借りて、お詫び申し上げます。

ASLE-Japan／文学・環境学会は創立20周年を迎えました。それを記念して出版された『文学から環境を考える：エコクリティシズムガイドブック』（勉強出版）を読むにつけても、親の代から子の代にスムーズにバトンがパスされていることを慶ばずにはられません。成人を迎えた息子・娘が立派な社会人として成長してくれることを祈るばかりです。（K・M）